



紀平真理子のオランダ通信

第3回

プロフィール

1985年、愛知県名古屋市生まれ。南山大学外国語学部スペインラテンアメリカ学科卒業後、コンタクトレンズメーカーで国内・海外業務に携わる。夫の駐在帯同で2011年12月からオランダのアムステルダム市に在住。父の家庭菜園を見て農業に興味を持っていたこともあり、すべてにおいて実利的で交渉上手なオランダ人によるオランダ式農業に魅了されたという。

商業的大麻栽培

オランダは、大麻とソフトドラッグが合法的な国であり、奇しくもそれが観光資源の一つとなっている。

2010年のマリファナ依存者は0.3%、中毒者は0.4%と想像より多くない。そんななか同年、政府はコーヒージョップ（法に従った一定量の販売と所持が許可されているソフトドラッグの大麻を含む製品を個人使用のために販売する小売店）で大麻を購入するための登録制度を導入した。この制度は地方自治体ごとに導入の可否が決められ、国境に近い南部の州はドラッグツーリズムを減らそうと登録制を取り入れた。じつはコーヒージョップには大きな問題がある。それは、大麻の供給は違法という政策が採られていることだ。そのため、合法的供給者がおらず、コーヒージョップは違法なサプライヤーから大麻を購入しなければならぬ。これが組織犯罪のまん延につながっている。

一方で、医療大麻に対する関心は高い。オランダには大麻を使った治療が有効な潜在患者が1万人いるといわれている。ただ、実際には2010年に約500人の使用にとどまった。問題点は、①医師や患者は大麻治療をタブーと考えている傾向がある、②政府が提供する大麻の種類が3種類のみ（ガンマ線照射

が義務づけられており、細菌のコロニー数がコーヒージョップで売られている大麻よりも少ない）、③価格がコーヒージョップに比べ圧倒的に高く、保険対象外、ということだ。また、オランダの医療大麻はフィンランドやイタリア、ドイツに輸出されているが、現状では保険対象外、もしくは一部保険適用のため、価格面でも販路拡大が難しい。しかし現在、製薬会社が医療大麻をベースにした新薬を開発中であり、また政府は4種類目の医療大麻栽培の可能性調査の準備中であることから、近い将来、医療大麻への見方が変わるかもしれない。

さらに、麻は繊維やオイルとしての活用も期待されている。オランダとドイツはテキスタイルや紙への麻繊維の有用性のリサーチを行ない、大麻の繊維は非常に強く、とくにリサイクル紙のパルプ繊維として有効だというレポートを提出した。今後、木材価格の上昇により、麻の需要が高まる見込みがあるものの、現在は麻工場の固定費が高く、販売されている麻製品（タバコ紙、コーヒーフイラー、断熱材、耐脂紙）の価格は木材パルプ製紙に比べ高い。88年よりEUは麻やケナフなどの再生可能作物の栽培支援を実施しており、オランダだけでなく、フランスやスベ

イン、オーストリア、イングランドを合わせて2万4000エーカー（約9800ha）以上の栽培面積がある。

とはいえ、社会的に受け入れられるには時間がかかりそうだ。ワヘニンゲン大学が研究用に約4万7000haの大規模な農園を持つていたが、違法栽培と疑われ、大麻繊維の研究用であるにもかかわらず、警察が大麻の撤去に取りかかった。途中で同大学が栽培許可証を提示したものの、長年の研究がこれで無駄になった。3〜4万のマリファナ農園があるオランダでは、そのほとんどが無許可であることが間違えられてしまった原因となったそうだ。

ユトレヒト市では、大麻使用者が市の決めた敷地内での大麻栽培を許可する試みを始めた。大麻をリリースの目的で利用するグループをつくり、市の管理下で栽培するというもので、質を向上させ、健康上の害の防止と違法栽培を防ぐのが目的だという。この試みをもとに法整備を行ない、国や市の管理下でコーヒージョップの供給元の整備と大麻の栽培、違法サプライヤーと合法栽培者のきちんとしたすみ分けをすることがオランダの商業的大麻栽培の目下の課題である。